

令和元年6月28日現在

機関番号：14302

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K04227

研究課題名(和文) 生徒指導の福祉的課題(貧困・虐待等)に関する研究

研究課題名(英文) The Current Welfare Issues of Student Guidance

研究代表者

片山 紀子 (KATAYAMA, NORIKO)

京都教育大学・大学院連合教職実践研究科・教授

研究者番号：60342169

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：我々の調査によって、若手教員は経験のある教員に比べて、福祉的課題があまり見えていないことを見いだすことができた。そこで生活のあり方全体が「貧困化」しているのではないかと、そしてそのことが「チームとしての学校」を阻害しているのではないかと仮説を立てた。しかし、予想とは異なり、一部を除いて仮説を裏付ける結果は得られなかった。これについて、アンケート調査による限界を認めた上で、若手教員と経験のある教員の間にある認識の違いは、両者の間の「感受性そのものの違い」にあり、「チームとしての学校」の阻害要因となっている可能性があり、これまで見逃されてきた視点だといえる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

チーム学校と一口に語られることが多いが、実際には若年層教員とそれ以上の教員とでは認識や感受性は大きく異なることが本研究で明らかになった。したがって、学校現場でチーム学校を進めていく上では、福祉的課題を含む生徒指導分野において、丁寧に進めていかなくてはならない、また対話もおろそかにしてはならない。ごく当たり前のことであるかもしれないが、学校現場では軽視されがちで、警鐘を促す意義をもつといえる。

研究成果の概要(英文)：This research starts with the hypothesis that the concept of “school as a team” in Japan is indirectly affected by the lower quality of younger teachers’ overall lives compared to that of more experienced teachers. Under these circumstances, an investigation by questionnaire survey was administered to teachers working in Japanese elementary and junior high schools. The results, however, mostly disproved the hypothesis, with the exception of a few cases. More importantly, it showed that younger teachers are relatively satisfied with their current situations, without any concerns. This suggests limitations of the survey and also brought up a new hypothesis: Are the different perceptions between young and experienced teachers attributed to “differences in sensitivity”? This sensitivity age gap could be the major hindrance in terms of “school as a team,” and it can be a new perspective to address these issues.

研究分野：教育学

キーワード：生徒指導 若年層教員 福祉的課題

様式 C - 19, F - 19 - 1, Z - 19, CK - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

近年の学校は、一般に生徒指導上の問題であるいじめ事件や体罰事件などが目に見える形で批判にさらされている。しかし、申請者がこれまで学校との連携を行ったなかで、家庭が変化しており、貧困や虐待等の家庭の諸問題と子どもの問題行動が密接に結びつき、それらの反応に教員が困難を抱えている。そして、それらのことにより教員が疲弊している。

具体的には、以下のような懸念があがっていた。第一に、福祉の力を必要とする子が増えている。子どもの貧困が進行しており、ユニセフの発表を参照すれば、そうした児童生徒は全体の16%を占め、35～40人のクラスであれば、6人程度が該当することになる。子どもの貧困は、眼鏡等が買えないことで学習が妨げられることもあれば、服装や持ち物、臭い等をきっかけにして、いじめの問題や不登校へと拡大することもある。

第二に、虐待を受ける子どもも増加している。被虐待体験を積み重ねた子どもは、表面上普通に見えても、内面では多くの葛藤を抱え、教室で孤立しやすい。これらの問題に対し、学校だけではもはや限界を超え、スクールソーシャルワーカーや児童相談所といった福祉機関等と、積極的にしかも日常的に連携しなければならないのは必至である。

第三に、特別支援教育を要する子どもの増加も見過ごせない。第四に、学習から遠ざかる子どもの存在も憂慮される。家庭の経済状況の悪化や教育力の低下によってもたらされるインセンティブディバイド(学習意欲の格差)の進行によるものである。

このような状況下に置かれた子どもたちから成る今の学級は極めて不安定で、いじめに限らず問題行動の生じやすい土壌がそもそもあふれている。特に精神的に不安定な子どもが教室で問題行動を起こし、他児童生徒の学習を妨害することによって、教員の精神的・身体的負担が大きいことも問題となっている。生徒指導をめぐって困難が発生し、教師が授業に専念できない現実もある。生徒指導と貧困等の福祉の問題を絡めたボーダー(境界)上の研究は、教員や学校に新たな視点や研修を提案するため、喫緊に必要とされている。

## 2. 研究の目的

そこで本研究では、生徒指導的観点から日ごろ教員が抱えている漠然とした不安や指導の難しさについて、福祉に絡む問題を特に調査し、実証的データを蓄積して、その具体的原因を明らかにしたいと考えた。教育と福祉を橋渡しするために、教員研修に新しい視点を提案することを目的とした。

仮説としては、(1)小中学校教員と児童生徒・保護者の間の生活に対する意識のズレが大きくなっている、(2)小中学校教員と児童生徒との間の生活に対する意識のズレに、保護者の生活や意識が大きく関係している、(3)小中学校教員の家庭(保護者)との連携に、福祉的な問題が大きく絡むようになってきているのではないかと考えた。

## 3. 研究の方法

小中学校公立教員が、生徒指導上どのような点に困難をかかえているのか、を質問紙調査及びインタビューによって解明しようとした。調査は、本科研においては合計3回行った。1回目は予備調査として、京都市の小中学校教員を対象に記述式で行った(小学校教員75名・中学校教員81名、計156名が回答)。2回目は本調査として京都市と福岡県の小中学校教員に対して行った(教員522名・保護者750名がそれぞれ回答)。3回目は、大津市の小中学校教員を対象に行った(小学校教員297名・中学校教員199名、計496名が回答)。以上の調査をもとに、今日の保護者の生活や規範意識が、教員や学校と具体的にどのようにズレているのかを明らかにしようとした。さらに、教育と福祉のボーダー上の問題について、スクールソーシャルワーカー等にインタビューを行い、日ごろ困難を感じている具体的な場面や状況を把握した。

学校の仕事の負担感の強さや困難さが指摘されているが、これらに対してまだ十分な検証がなされているわけではない。特に教育と福祉のボーダー(境界)上の視点は、検証が不十分である。本研究では、具体的に何がどのようにズレているのか、学校や教員はどのように対応すればよいのかを明らかにし、研修プログラムを開発するため、独創性の高い研究になる。

多くの教員が個々人で悩み、個人の責任であると半ばあきらめている生徒指導上の諸問題について、本研究によってその成果を学校現場に還元できれば、教職市場に自信と安心感をもたらすことに貢献すると考えられ、本研究の成果がもたらす意義はある。

## 4. 研究成果

最大の成果は、若年教員には子どもにまつわる福祉的な課題があまり見えていないということ、またそのことを若年教員は自覚しておらず、教員生活を楽しいと感じており、若手教員と経験のある教員の間にある「感受性そのものの違い」が、「チームとしての学校」の阻害要因となっている可能性があり、これまで見逃されてきた視点を提示できたという点である。以下、それらについて説明を行う。

まず、何が学校のチーム化に向けて障害となっているのかについて、教員と保護者の意識に焦点化し、検証を行った結果、以下のことが明らかとなった。教員と保護者の間に生徒指導をめぐって意識のズレがある。教職経験5年以下の若手教員とそれ以外の熟練教員の間に生徒指導について意識のズレがある。小学校教員は中学校教員よりも子どもとのかかわりに自信を持っていない。女性教員は男性教員よりも子どもとのかかわりに自信を持っていないこ

とがわかった。

特に、教職経験5年以下の若手教員とそれ以外の経験のある教員の間に生徒指導について意識のズレがあった点に筆者らはもっとも高い関心を寄せた。福祉的な点について教職経験5年以下の教員は、現実が見えていないのである。若手教員が急増している今日、多くの教員に福祉的な課題が見えにくいという状況はかなり危機的である。

教員の認識と保護者の認識にもズレが見られた。認識にズレがあることそのものは問題ではないとしても、そのズレが教員と保護者の間の相互理解に基づくコミュニケーションを難しくしてしまうとすれば問題である。そのような状況では、本来十分にコミュニケーションをとることができれば解決可能な問題も、いたずらに困難な問題になってしまいかねない。

教員の多忙化が一因となって、十分な教育活動が難しくなっているという認識は、教員と保護者との間で基本的に一致していると思われる。しかし、保護者の声に、授業や学習指導に対する不安や不満が多いことの背景にどのような課題があるかは、教員には十分には認識されていない可能性がある。また、学校が保護者に対するアカウンタビリティを重視せざるを得なくなっている近年の潮流が、保護者の目には「よそよそしい態度」に映っている面もあり、相互の信頼関係を深層レベルで掘り崩す結果を招きつつあることが懸念されることである。

保護者に経済的、時間的、心理的なゆとりがないこと、保護者同士が孤立しがちなことに対する懸念は、保護者と教員との間で基本的に一致している。教員は、家庭内で生じている児童生徒の生活態度や生活習慣の問題を、子育てに対する保護者の理解不足や認識不足と捉えがち傾向があるが、保護者は主として経済的な問題に起因する就労環境の問題として経験している例が多く、ここには認識の大きな齟齬が生じている可能性がある。総じて、教員には、保護者が抱える経済的困難さが、さまざまな剥奪へと連鎖しがちであることが、十分には見えておらず、適切に理解できていない恐れがある。家庭の状況に関する不十分な理解に基づく、児童生徒への指導や保護者とのコミュニケーションは、教員の側が問題の本質的な所在を見誤り、的を外したものとなるリスクがあることに注意しなければならない。

総じて、保護者のアンケートの回答からは、教育行政の関係者や学校関係者が熟読すべき内容のものが多々含まれていた。保護者が子どもの成長に対して感じている不安、生活を維持するために子どもに十分に関わることができないもどかしさ、こうした背景の理解が切実に求められていると考えた。

そこで、続けて若手教員と経験のある教員との間に、生活意識と生活様態、および成長期の経験に差があるのではないかという仮説のもとに、新たなアンケート調査を実施した。しかしながら、予想とは異なり、一部を除いて仮説を裏付ける結果は得られなかった。すなわち、若手教員は経験のある教員に比べて、生活のあり方全体が「貧困化」しているのではないかと仮説を立てたわけであるが、結果はむしろ若手教員の方が相対的に現在の仕事と生活に満足感を抱いており、若手教員は何ら困り感を感じていなかった。仮説とは異なっていたわけである。経験のある教員と比較して、若手教員には生活経験のある種の「貧困化」が生じているのではないかという仮説を持っていた（なぜなら、そのような仮説が、筆者らの研究（片山・角田・小松，2017）で示された教職経験5年以上と5年未満の教員の間認識の大きなギャップを説明することができるように思われたからである）が、筆者らの予想とは異なり、必ずしも仮説を裏付ける結果は得られなかった。先ほども述べたように、本調査の仮説の一部には、若手教員は熟練教員に比べて、生活のあり方全体が「貧困化」しているのではないかというものがあつたが、今回の結果はむしろ、若手教員の方が相対的に現在の仕事と生活に満足感を抱いていることを示唆するものであつた。

もし、若手教員の比較的多くが、学校をめぐる私たちの眼前に広がる光景に対して、若手教員と経験のある教員との間には、かなり異なった受け止め方があることが想定される。そして、そうした背景のもとに様々な形で顕在化する認識のギャップは、思いの外大きいものかもしれない。このことは、学校が児童生徒の健全な育みに取り組む中で、何を重要な課題とみなし、何をそれぞれの教員が自分の身につけるべき力として思い描くかをめぐっても、問題をはらんだ状況を生んでいるかもしれない。私たちは、「現れている」ものは見ることもできても、「現れていないもの」を見ることは難しい。目の前に現れていないもの、目の前では生じることがないものを「見る」ためには、「生じうる可能性があるのに実現していない何ものか」に対する想像力が不可欠である。しかし、そうした想像力を成長の過程の中で獲得することは、現代社会においてはさまざまな要因から難しくなっていると思われる。土井隆義（2016）は、現在の多くの子どもたちが生きていくと考えられる「生活圏が内閉化した日常世界」では、実はその日常世界の外には努力すれば報われる機会があるにもかかわらず、その機会が剥奪されていることが自覚されにくい状況があることを指摘して、「剥奪感をも剥奪されているという意味で、ここには剥奪の二重化が生じている」と述べている。このような土井の指摘に倣えば、子どもたちにとって、自分たちが剥奪的な状況に置かれていることを感受する感性そのものの育みが損なわれているあり方を、「剥奪感の剥奪」と呼ぶこともあながち不適切ではない。子どもたちばかりでなく、同様の事態は比較的若い世代の大人たちにも当てはまると言えるかもしれない。情報通信機器を活用する力に長け、有り余るほどの情報の海を泳ぐことができることは、それと引き換えに、今自分の目の前に現れていない何ものかを剥奪され、何ものかから疎外されているかもしれないという感受性を育むことと、ある種のトレードオフの関係になるのかもしれない。

さまざまな福祉的課題を含む、子どもたちが教育を受ける過程で生じている困難な問題に取り組んでいくうえで、学校内の教職員間の丁寧な対話的コミュニケーションが、これまで以上に必要不可欠であるように思われる。そのような状況の中で、若手教員と熟練教員とのギャップは、どのように作用する可能性があるのか。若手教員は、現在の子どもたちや若い親世代が当たり前前に呼吸しているのと同じ空気の中にいるのかもしれない。そこでは、子どもたちや若い親世代の「当たり前」の日常的なあり方に、違和感を持つことは少なく、ましてやそれを問題と感じることは少ないかもしれない。そこに注意を促す経験のある教員に対しては、「考え方が古い」と、内心で一蹴する態度をとるかもしれない。しかし、その「当たり前」の日常の中で、どんな可能性が見失われているのかについては、先にも触れたように、十分に想像し考える機会をあまり持ってこなかったかもしれない。例えば、表面的に対人関係が「問題のない」「平穏な」ものに見えることが、葛藤への取り組みを経て相互に成長していく機会を奪う可能性には鈍感であるかもしれない。それ以前に、「葛藤」がどういうものか、言葉の定義以上の実感を持って理解することが、すでにひどく困難であるかもしれない。

こうした異質な経験のあり方を持つ者同士が、そしてそれぞれに、自分の経験と理解に閉じこもらずに他者と対話していくことに固有の困難さを抱えがちな者同士が、そうした相互のあり方と違いを理解しようと努めながら、子どもたちを目の前にしつつ、その保護者たちに思いを寄せつつ、互いに学び合う関係を築き上げていくことが、現在の学校に求められている喫緊の課題ではないだろうか。

筆者らはこれについて、アンケート調査による限界を認めた上で、若手教員に自分たちが剥奪的な状況に置かれていることを感受する感性そのものの育みが損なわれているのではないかと、一方で経験のある教員は自分自身の経験が災いして、今、目の前で実際に起きていることを、ありのままに受け取ることはできずにいるのではないかと、本研究を通して新たな仮説を立てるに至った。すなわち、若手教員と経験のある教員の間にある認識の違いは、両者の間の「感受性そのものの違い」に起因するのではないかと推考したわけである。この「感受性そのものの違い」が、「チームとしての学校」の阻害要因となっている可能性があり、これまで見逃されてきた視点だといえる。こうした新たな仮説に基づいて、対話の質や対話の方法についても、引き続き研究を行なうつもりである。

#### 引用文献等

- ・ ベネッセ教育総合研究所「若者の仕事生活実態調査報告書 - 25～35歳の男女を対象に - [2006年]」 <https://berd.benesse.jp/koutou/research/detail11.php?id=3175>
- ・ ドナルド・A. ショーン著、柳沢昌一・三輪健二訳『省察的实践とは何か プロフェッショナルの行為と思考』鳳書房、2007年。
- ・ 阿部彩『子どもの貧困 日本の不公平を考える』岩波書店、2008年。
- ・ 阿部彩『子どもの貧困 解決策を考える』岩波書店、2014年。
- ・ 大田なぎさ『スクールソーシャルワークの現場から 子どもの貧困に立ち向かう』本の泉社、2015年。
- ・ 土井隆義「ネット・メディアと仲間関係」佐藤学・秋田喜代美・志水宏吉・小玉重夫・北村友人編『岩波講座 教育 変革への展望3 変容する子どもの関係』岩波書店、2016年、p. 126。
- ・ 秋田喜代美「子どもの学びと育ち」佐藤学他編『岩波講座 教育 変革への展望1 教育の再定義』岩波書店、2016年、pp.97-150。
- ・ 暉峻淑子『対話する社会へ』岩波書店、2017年。
- ・

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

- (1) 片山紀子・角田豊・小松貴弘「チーム学校に向けた現代的課題(3) 生徒指導的観点から」『京都教育大学紀要』京都教育大学、第134号、2019年3月、pp.51-64、査読なし。
- (2) 片山紀子・角田豊・小松貴弘「チーム学校に向けた現代的課題(2) 生徒指導的観点から」『京都教育大学紀要』京都教育大学、第131号、2017年9月、pp.33-46、査読なし。
- (3) 片山紀子・角田豊・小松貴弘「チーム学校に向けた現代的課題 生徒指導的観点から」『京都教育大学紀要』京都教育大学、第130号、2017年3月、pp.35-47、査読なし。

〔学会発表〕(計3件)

- (1) 日本生徒指導学会 第19回大会

片山紀子・角田豊

「生徒指導上の現代的課題 若年教員と中堅以上の教員の差異を中心に」

2018年11月18日 同志社大会場

- (2) 日本生徒指導学会 第17回大会

片山紀子・角田豊

「生徒指導上の現代的課題 ダイバーシティ化が進むなかで」  
2016年10月30日 文教大学会場

(3) 日本教育経営学会 第56回大会  
片山紀子・角田豊・小松貴弘  
「生徒指導上の現代的課題 教員及び保護者へのアンケート調査をもとに」  
2016年6月11日, 京都教育大学会場

〔図書〕(計3件)

片山紀子『3訂版 入門生徒指導-「いじめ防止対策推進法」「チーム学校」「多様な子どもたちへの対応」まで』学事出版, 2018年2月, 総ページ186。

片山紀子編著・森口光輔『やっってるつもりのチーム学校』学事出版, 2017年8月, 総ページ191。

角田豊・片山紀子・小松貴弘『子どもを育む学校臨床力 - 多様性の時代の生徒指導・教育相談・特別支援』創元社, 2016年, 総ページ236。

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名: 角田 豊  
ローマ字氏名: KAKUTA YUTAKA  
所属研究機関名: 京都産業大学  
部局名: 文化学部  
職名: 教授  
研究者番号(8桁): 30233670

研究分担者氏名: 小松 貴弘  
ローマ字氏名: KOMATUSU TAKAHIRO  
所属研究機関名: 京都教育大学  
部局名: 連合教職実践研究科  
職名: 教授  
研究者番号(8桁): 40305032

科研費による研究は, 研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため, 研究の実施や研究成果の公表等については, 国の要請等に基づくものではなく, その研究成果に関する見解や責任は, 研究者個人に帰属されます。